

海外で働く, ということ

～東南アジアの日本人土木技術者を訪ねて～

藤井 聡

日本の土木の海外展開

日本の土木の海外展開. その重要性は土木業界の中で急速に大きなものとなりつつある. その背景には, 土木業界内に昨今広がる国内市場についての閉塞感があり, 海外における土木的支援が日本政府の重要な方針の一つとして位置づけられているという外交戦略がある. この外交戦略のさらに背後には, 国益という観点があり, 日本の土木技術が世界的な水準にあるという事実がある.

しかし, 筆者のように海外で技術者として働いた経験の無い者には, 海外で働くということが一体どういうことであるのかが, よく分からない. それゆえ, 何となく海外に出て働こうという気が起こらず, 語学も向上せず, そのために海外に出て働こうという気がさらに無くなってしまう——. 日本の土木の海外展開が遅々として進んでいないのだとしたら, その背後にこうした事情があることは間違いないだろう.

今回筆者は, 本誌特集取材のためにインドネシアとベトナムに出かける機会を得た. その取材中, 様々な形で海外勤務の方々のお話を伺った. ここでは, 特集の中では伝えきれなかった皆さんの言葉を借りながら, 海外で働くということの一端を紹介したい.

技術者としてのやり甲斐

国土交通省から在ベトナム日本大使館に赴任してからまだ 3 週間目という木本さんに, 海外勤務の第一印象を伺った. 円借款による運輸基盤整備を主に担当する木本さんは言う, 「ベトナムの交通問題を考えると, 基本的なインフラの必要性がダイレクトに伝わってきます. ピュアなニーズ, と言うんでしょうか. とてもやり甲斐を感じます». 同様のお話は, 海外勤務歴 3 年, ハノイ駐在の橋梁のベテラン技術者, 吉澤さんからも伺った. 「海外には日本では体験のできなかつたような様々な現場があつて, 技術者として色々な試行錯誤を重ねることができるんです. やはり, 海外勤務の醍醐味はそこにあると思います」.

言葉と文化の壁

このように海外は日本の土木技術者が活躍できる場所である一方で, 海外ならではの苦労も少なくない. まず第一に挙げられるのが言葉の壁. インドネシアの鉄道プロジェクトを長年手がけている奥原さんが言う. 「一番苦労するのは, やはり, コミュニケーション. 細かい機微のやりとりが, どうしても難しいんです». その難しさは, 必ずしも会話だけではない. 海外プロジェクトを多く手がける城さんは言う. 「いくら英語が上手には話せても, 文書をきちんとするのが難しいんです. ヨーロッパ人ならすぐに分かる微妙な行間の意味が, どうしても分からなくて苦労することがあります」.

例え言葉が通じたとしても文化的な壁も厚い。例えば、ある仕事を頼んだところ、それがやられていない。その理由を問えば他の誰かが関与している、とのこと。その誰かを会議室に呼ぶ。するとまた他の誰かが関与しているとのこと。それを繰り返しているうちに会議室に十何人以上も集まったこともあると言う。ただし、会議室に呼べるうちはまだ良い。そのうち、その理由に「神様」が登場することもしばしばとのこと。

しかし、壁はあくまでも壁。決して乗り越えることが不可能なわけではない。あきらめず、根気強く彼らの理由を理解しようとすれば、彼らには彼らなりの「理由」があることが見えてくるのだという。そこまで行けば、いつのまにか信頼関係が芽生え、組織としての一体感が生まれ、仕事が前に進み出すのだという。

壁を乗り越える

インドネシア駐在歴 12 年の中川さんは、ジャワ北線の保線現場の作業所長。この作業所の日本人は中川さんを含めて 2 人だけで、後は全て現地の労働者。中川さんも文化の壁を実感している日本人技術者の一人である。

「ほんまにねえ、インドネシア人は日本人と違うんですわあ。」

大阪の阿倍野出身の中川さんは、綺麗な大阪弁で丁寧に教えてくれた。現地では、技術的な面はもちろんのこと、チームで働くということそのものについても教えていかなければ仕事は進まないのだという。だからこそ、作業服の着方、線路横断時の左右確認、時間管理、休憩の仕方等、一つ一つを丁寧に教えていく。何も高度な土木技術を教えることだけが技術移転なのではない。こうした地道な指導の全てが技術移転なのだ。その結果、今では誰もが驚くほどに効率的な保線チームができあがったのだという。このチームならインドネシアはもとより、他のどの国の現場でも、立派に仕事ができる。

そうした地道な努力を他の先進国はやっているのでしょうか、と色々な方に尋ねたところ、どうやらそうでは無いらしい。国によっては効率的に仕事をこなすために、自国から技術者や安い賃金で働くことができる労働者も一緒につれてくるケースが多いとのこと。言うまでもなく、そういうやり方ではその国はいつまでも自立できない。それを伺ったおり、地道な技術移転の努力があってはじめて、インドネシアが本当の意味での自立に近づいていくんですね、という旨のことを投げかけた時、中川さんは、次のように言われた。

「それ、分かっただけで、ほんまにうれしいですわあ。ほんまにねえ、最終的には、インドネシアのスタッフみんなに自立してほしいんですわあ。」

赴任国に対する思い、祖国に対する思い

一見、中川さんのようなやり方は、国家的な外交戦略や自分自身の企業の収益だけを考えるなら得策ではないように見えるかも知れない。ところが実際には、企業側からしてみれば現地の技術者の育成は人件費の圧縮を意味し、個人的な信頼関係の育成は外交戦略の上から考えても強力な財産である。しかしながら、現場の思いはそういった企業の論理や

外交戦略といった次元を越えた所にある。中川さんをはじめ、現地に長く滞在している多くの方々が、その国に対する「愛情」としか表現できないような思いを抱いておられることがひしひしと伝わってくる。

ベトナムに通算 8 年駐在、ベトナムの南北鉄道プロジェクトを取り仕切中島さんは言う。「いったんある国で働くと、その国のことがどうしても気になってしまふんです。その国でいろいろな事があっても、しばらく日本にいれば、また、その国に行きたくなくなってしまふ。その国の事が、かわいくなる、というんでしょうか」。前出のインドネシア駐在の奥原さんは言う、「やっぱり、インドネシアが好きですね。第二の故郷と言えればいいんでしょうか、もうそれは私の財産みたいなものです。それが海外で働くことで得られたことの中で、一番うれしかったことじゃないでしょうか」。皆で雑談をしていたおりにこの奥原さん、「日本に帰って、またインドネシアに帰ってくると、本当にほっとするんですよ」とおっしゃった。その時、他の駐在員の皆さんも一様に、どっと笑いながら同意していた。

ただし、赴任国は第二の故郷であったとしても、やはり、第一の故郷は日本。祖国に対する思いは複雑で深い。インドネシア駐在歴 13 年の鉄建建設（株）のジャカルタ事務所長の大塚さんは、食事中にぽつりと言った。「なんていうんでしょうか、やっぱり、海外にいればいるほど、日本の事が好きになっていくんですよ」。それを聞きながら、現地の駐在員の方々も、そして海外留学経験を持つ我々も皆しみじみと同意した。言葉も文化も気候も風土も何もかも日本とは異なる異国での生活を通じてはじめて、自分でも気づかなかったほどに深い、心の芯のようなところに、祖国に対する何とも言えない感情が存在することに、皆、それぞれ気づくのである。海外赴任は、日本人にもう一つの故郷を与えてくれると共に、日本が自分自身にとって生まれ育った特別な国であることに気づかせてくれるのだ。

海外で働くために

今回の取材を通じて、筆者は、日本の土木の海外展開の必要性を確信した。それは一つには、国内市場の動向を踏まえた時、日本の土木業界の持続的発展のためにも、日本の土木技術を次世代に伝承していくためにも、「現場」を海外に求めていくことが必要とされているからである。そしてそれと共に、日本の土木の海外展開が重要な国家的外交戦略の一つだからでもある。ベトナムもインドネシアも、シーレーンや資源の確保、対中国との戦略的關係等、年間約一千億円の資金援助をするに足だけの日本の国益にとって重要な国家なのである。

しかし、これらの理由だけで海外で働こうと考えるのは、土木技術者としていかなものか、ということもまた痛切に感じた。木技術者として最も直接的で、しかも、最も本質的な理由は、我々の技術を求めている人たちがいるのだ、という実にシンプルなその一点にある。利益や国益はそのための前提であるに過ぎない。このことは例えば、海外で活躍した日本の土木技術者の草分け、青山^{あきら}士^{あきら}の碑文「人類ノ為メ、国ノ為メ」という言葉に象

徴されているように思う。企業の利益や国益とは別の次元で、技術者が技術者である以上、その技術を求める人々にそれを伝えようと思うのは「宿命」とすら言えるのではないか。

もし我々がその「宿命」に身ゆだねるのなら、そのために何を備えておくべきなのか。ジャカルタの大塚さんに若い技術者が海外に出るまでにやっておくべきことは何ですか、と伺ったおりに、こういう言葉を頂いた。「それは多分、日本の仕様書をきちんとしておくこと、日本語をきちんと話せること、そして、紳士であること、じゃないでしょうか」。語学や海外の勉強をする以前に、日本人としてきちんと言葉を使い、大人としての振るまいができ、一人前の技術者であることが何よりも重要なのだ。それさえ出来れば、海外だからといって何も心配する必要などない。海外経験通算9年、ラオス、シンガポール、ベトナムでの現場を経験された大林組の岡本さんは、冗談交じりにこう言われた。「先方との打ち合わせの時、先方の英語が分からなければ分からない、と言えればそれで何とかなるんですよ」。語学は重要だ。しかし、それ以上に重要なのは、きちんとした技術力と堂々とした心構えなのだ。

海外へ

現地でお目にかかった日本人技術者の皆さんは、それぞれの立場や国によって思いは色々でも、一様に広い視野で大いなるやり甲斐を感じつつ生き活きと日々の仕事に対峙しておられた。この取材を通じて筆者が、そして取材陣が皆一様に感じたことは、海外で働くことの素晴らしさ、としか表現し得ないような感覚であった。しかしそれが如何様に素晴らしいのかについては、おそらくは、海外に出て、それぞれに感じて頂くしかないように思う。一年といわずとも半年でもいいと思う、一度は海外に出てみてはどうだろう。その経験がどのようなものであったとしても、それは技術者として意味あるものとなることは間違いない。そして望むらくは、日本人としての常識と技術力とを兼ね備えた全ての土木技術者が、少なくとも一度は海外経験を持つようなシステムを少しずつ作っていったはどうだろうか。そうすれば、日本の土木のポテンシャルがさらに向上することとなる。そしてそれが、日本の、そして世界の発展へと繋がっていくこともまた間違いない。

謝辞：今回の取材に協力して下さった日本人技術者の方々全てに、深謝の意を表します。ありがとうございました。